

あの流れる雲に

ふと見上げた 夏の空から
この心 自由に懂れて
流れる雲に委ねる

まるで橋のように 空を流れ行き
ここから見える 遠くの山
だんだん小さくなって溶けゆく

届きそうで届かない
静かに浮かんでいるように見えても
よく見ると輪郭を変えながら
素早い速さで動いている

空の向こうへあの流れる雲に
ゆっくりと旅したいこと願っても
簡単でないことを
さとらせてくれる

ふと見上げた 夏の空から
この想い 届くように
言えなかったことも雲に委ねる

まるで綿のように 空を流れゆき
柔らかな陽射し浴びて
揺らぐ輪郭を指でなぞる

この指先のかすかな温もりが
浮かぶ雲に伝わること感じる
よく見ると青空に吸い込まれながら
絶え間なく消えてゆく

空の向こうへあの流れる雲に
こっそりこの願い託したならば
この騒ぐ胸の中
きっと届けてくれる

七夕を過ぎても

いつもよりも多くの人
その日は真夏のはじまりだった

改札口出たら笹飾り
願い事書いた短冊に

誰かが書いた車
懐かしさがよぎる

晴れた夜空にモバイル当てて
カメラ越しに確かめる
黒い雲の様に見えてる
天の川をまたぐ星

あれは杜の都にいた
その日は真夏が終わる頃だった

商店街歩くアーケードに
突き刺さるような飾り物

たくさんの折り鶴を
僕たちはくぐった

晴れた夜空にモバイル当てて
カメラ越しに確かめる
黒い雲の様に見えてる
天の川に光る星

この日の幸せ
いつまで続くのか

晴れた夜空にモバイル当てて
南斗六星確かめる
銀河系の真ん中にある
ブラックホールの影を探す

麦わら帽子

乾いた道の上 黒く短い影
見下ろす足元に てるてる坊主
目の上に見えてる 麦わら帽子に
時折ふく風と 夏の香りが

心配事一つもない
太陽に包まれながら

忘れていたあの頃の
戻らない時間思い出す

畑の向こうの 一つ南の道
帽子の底を下げ あごを上げて
黒目を下にして 遠くを見る
元気に網を振る 男の子がいる

悩み事ほとんどなく
足取りも軽く見える

忘れていたあの頃の
自分の姿映してる

顎紐無くした 麦わら帽子
ふく風に持って行かれないよう
てっぺん抑えた手に感じる風

かすかな記憶の 遠くのまち
帽子の影の上 後ろからそっと
近寄る日傘の 影が覆ってくる
安心な香りに 包まれてくる

忘れていたあの頃の
戻らない時間思い出す

忘れていたあの頃の
自分の姿映してる

そこまでたどり着いた

しぶきをあげながらこの湖
白い船はゆっくり滑ってゆく

体を全て預けて
心は空を舞う
散策の終わりとして
疲れた足も投げ出し

そこまでたどり着いた
この船でUターンする窓から感じる風

よく見ると操舵室の後ろの看板
このクルーズ船の引退を告げる

初めて乗ったのに
もう二度と乗れることはない
クルーズはただの移動ではないのに

そこまでたどり着いた
この船の終着点 冒険の終わり

見えるものしか見ない

短い言葉で
たくさんのこと伝える
あれこれと考えすぎて
わかりにくくなっていた

見えないものまで見ようとするごとと
見えるものしか見ないごとと
使い分けるタイミングある
ああ本当に難しい

最後には思うこと
やはり素直なことがいいかも

努力して追求して
考え深いことよりも
誰の目にも映るほど
わかりやすいのがいいこともある

見えないものまで見ようとするごとと
見えるものしか見ないごとと
使い分けるタイミングある
ああ本当に難しい

最後にはたくさんの
共感さそうことがいいかも

ちがう

そうだと思ってたのに こうだった
ここでもやっぱりこうなのか

リアリティショックというほどの
ことでないけど
やはりこれは思ってたことでない

こんなはずではなかったというのと
こういうものだというのはメンタルが違う
それは自分の覚悟の違いというけれど
実際に起こる出来事にただ戸惑う

これは頭の中で描いてきたことでない
なんとか切り替えて鍛えるレジリエンス

ここではそれができるはずだった
最後は根回し足りなかった

ワーカホリックというほどの
ことでないけど
それでも無性に悔しい時がある

強いストレスをマイナスととらえるのと
プラスに変えてゆくのはメンタルが違う
それは自分の気持ちの違いというけれど
実際に起こる出来事にただ戸惑う

これは頭の中で描いてきたことでない
なんとか切り替えて鍛えるレジリエンス

目をつぶった瞬間に

目をつぶった瞬間に
透き通る水面が広がる
絵でしか みたことないところ
緑輝く御射鹿池が

忘れかけていた頃に
映し出される心象風景
本当に歩いている
右から左 白い馬が

どうしてこんな色してるのか
この世のものと思えない色
息を呑むような美しさ
明るい緑 暗い緑

再び目をとじたとき
緑の色が青に変わる
幻想的な景色が
怖いほどに背中振るわす

ふとした瞬間に
映し出される心象風景
明るかった空の色が
暗い紺に変わっていた

どうしてこんな色してるのか
この世のものと思えない色
思わず逃げてしまいたくなる
暗い中に青く燃えてる